

雲州本延喜式と藍川慎 ・屋代弘賢・塙保己一

大日方克己

近世において最も流布した延喜式は享保本と呼ばれる版本で、国史大系の底本にもなっている。享保本は、慶安元年（一六四八）の林道春跋が附されて刊行された明暦三年（一六五七）版を元に、寛文七年（一六六七）の松下見林による再訂をうけて修補し、享保八年（一七二三）に刊行されたものとされる（早川万年「延喜式の版本について」『延喜式研究』一、一九八八年）。これを誤りが多いと批判して、文政十一年

（一八二八）に藩主松平斉恒校訂として松江藩から刊行されたのが、雲州本と称される版本である。

雲州本の大きな特徴は、本文五十巻の他に、校訂の根拠を記した考異八冊と考異附録上（発音）・中（序表考）・下（祥瑞考）の計十一冊が附属していることにある。

考異には凡例が附されていないため、何を底本としたか、用いられた諸本名が何を指すのか不明であったり、一部で校訂本文と食違いがみえるなどの問題はあるが、校訂に用いられた百六十点以上にのぼる和漢の諸書をみると、その学問的背景をうかがうことができ興味深い。

雲州本には斉恒の次代藩主松平斉貴の序が附されている。幕府右筆屋代弘賢の筆になるこの序は、次のようないきさつを記している。先代斉恒が、流布している延喜式は「濫書を刻し、繆誤極めて多し」として、諸本を求め正しい校訂本を作ろうとしたが、没してしまったため、斉貴がその意志を継いだ。当初は総校校塙保己一を中心

したが、彼も没したため松江藩士藍川慎らが引き継ぎ、七年をかけて文政十一年二月に完成したという。

逆算すると文政五年から事業が始まったことになる。一方、同四年正月二十五日付の松江藩領出雲国意宇郡西組与頭から組内の庄屋にあてた触状（松江市六道町木幡家文書、蒐古館所蔵）によると、「延喜式と申書物、此度上々判本出来候二付御入用之旨、右之写し本歟、又ハ判本ならハ古キ分所持いたし居候もの有之候ハ、差出し候様」「村々御問合、所持いたし候もの有之候ハ、早々為持可被差出候」と、延喜式の写本、古版本などの調査が諸村に対して命じられている（小林准士「六道町の近世」『六道町史通史編』下、二〇〇四年）。すでに校訂のための諸本の搜索が始まっていたことがわかる。松平斉恒が死去したのは同五年三月、塙保己一の死去は同四年九月、死が届出られたのは翌五年七月九日のことである。実質的には同五年以降、藍川慎を中心に進められていったので

ある。

当初塙保己一に託された背景の一つには、たとえば安永六年（一七七七）ころに松江藩士萩野鳩谷（天愚孔平・孔平信敏）が塙保己一の立志伝『塙勾当伝』を記したり、塙保己一も「雲州侯筆塚の記」（『水母文集』、文政元年十月）を記したことなどにみられる、松江藩とのつながりがある。また塙保己一周辺でも早くから延喜式校合が行われていた。

屋代弘賢は、塙保己一に師事するとともにその事業を援助した人物としても知られているが、日記『池底の玉藻』（東洋文庫所蔵）では、天明九年（寛政元年、一七八九年）二月十三日、三月十三日などに塙亭で開かれた延喜式校合の会に参加したことを記している。その後、塙保己一は寛政七年に温故堂（和学講談所）を設立し、国史・律令・延喜式など三十三書目の会説・校正を学則として掲げた。寛政十一年には、その三十三書目のうち日本後紀以外の五国史や令義解、類聚三代格など十三書目の出版

を幕府に申請する。そのなかには延喜式は含まれていない。生前に刊行が実現したのは、そのうちの『令義解』（寛政十一年刊）、『百鍊抄』（享和三年（一八〇三）刊）、『扶桑略記』（文政三年刊）および申請には含まれていなかった『日本後紀』（寛政十一年刊）だけだった（太田善磨「塙保己一」吉川弘文館、一九六六年）。こうした事情もあって、塙保己一は松江藩の事業を通じて延喜式の校訂と出版を実現させようとしたのかもしれない。

雲州本の校訂に用いられた諸本をみると、塙保己一との関係は明瞭である。

ほぼ全巻にわたり校訂に用いられているのが、刻本と貞享本・京本・林本と称されている延喜式諸本である。このうち刻本は主として享保本を指し、巻九・十でのみ松下見林による訂正を意識して明暦本と享保本とに区別しているとみられる。

貞享本は宮内庁書陵部所蔵の貞享五年（一六八八）坊城俊方書写本にあたる。それは「温故堂文庫」「和学講談所」等の印

記をもつ、塙保己一・和学講談所旧蔵本である。この貞享本で校訂に多く用いられているのが京本、中本である。虎尾俊哉氏によると、京本は京極宮家本と推測され、現在存否不明となっている。また中本も現在存否不明の林読耕斎旧蔵中神守節本で、雲州本にみえる林本はこの中本の同本異称ではないかとされる（『訳注日本史料延喜式上』解説、集英社、二〇〇〇年）。雲州本で校訂に用いられた京本、林本はいずれも貞享本でも主要に用いられていたわけである。一方雲州本では、貞享本とは違う箇所

で京本または林本を用いている場合もあるので、貞享本からの孫引きではなく、独自に両本を参照していたとみられる。とはいえ貞享本に大きく影響されていたことは間違いない、それはすなわち塙保己一を継承したものだといつてよい。

塙保己一の死後を引き継いだのが藍川慎であるが、松江藩の「列士録」（島根県立図書館所蔵）には玄慎の名で経歴が記されている。それによれば、松江藩医師藍川通

清の子として江戸に生まれ、長崎で唐医胡
亀新に学んだ後、文化二年（一八〇五）に
藩医師となり、ほとんどを江戸藩邸で仕え
ている。文政十一年八月五日には「月潭院
（斉恒）横御在世之節、延喜式御校合御手
伝被仰付、数年打込候。格別出精相勤、大
部之書籍校合行届、御蔵板出精、今般御献
上相済」ということで、加米十俵と銀二十
枚の下賜にあずかっている。

藍川慎はその他に多くの編著を残してい
る。今のところ藍川脊、原脊、原藍泉、源
管占、茅山などの名で二十点ほどを確認し
ている。医学・鍼灸関係が半数近くを占め
るが、なかには外台秘要方、大同類聚方な
ど唐代や平安時代の医書の注釈もある。ま
た「和名抄考文」（原藍泉・原脊、無窮会神
習文庫所蔵）、「博桑果図考」（藍川脊・源
管占、慶応義塾図書館魚菜文庫等所蔵）、「
康頼本草校註」「查苞」「查苞茅山」（藍川
慎、無窮会神習文庫所蔵）等本草書類、出
雲国式内社に関する「雲州式社集説」（原
脊、無窮会神習文庫等所蔵）なども注目さ

れる。和名抄や康頼本草などは雲州本の考
異で直接用いられ、式内社の考証は巻九・
十の校訂に直結する。また「列士録」で文
政十三年に藩主斉貴に献上されたと特筆さ
れる「姓氏一覽」（国立公文書館・西尾市
岩瀬文庫等所蔵）もある。「新撰姓氏録」
の各氏族を検索しやすいうように第一字の画
数順に配列し、あわせて六国史等から関係
史料を抽出して掲載したものである。同様
に藍川慎の編著の多くは古典籍から記事を
検索抜粋する形をとるものが多い。いずれ
も延喜式校訂にかかわり、あるいはその学
問的背景となるものといえる。

藍川慎らによる作業が始まろうとするこ
ろ、文政五年七月四日、屋代弘賢日記「水
馬掌録」には「雲州故太守遺物利休茶器一
口賜、藍川玄慎持参」という記事がみえ
る。「水馬掌録」を紹介した森銃三「屋代
弘賢」はこの人物を「玄悦」と翻刻してい
るが（「森銃三著作集」第七巻、中央公論
社、一九七一年）、国立国会図書館所蔵自
筆本では「玄慎」と判読できる。屋代弘賢

と藍川慎の間の直接的な交流がみてとれ
る。また屋代弘賢の旧蔵書、池底叢書（宮
内庁書陵部所蔵）のなかに「雲州式社集説」
がみえることも両者の関係をうかがわせ
る。

こうした塙保己一、屋代弘賢、藍川慎お
よび松江藩の交流ネットワークと学問的背
景のなかで雲州本延喜式の成立を考えるこ
とができる。その詳細は今後の課題とした
い。

（おびなた・かつみ 島根大学法文学部教授）